

名寄市&リンゼイ市

優しかったホスト・ファミリー

平沢悦子

私は、日本に帰って来てから、「カナダで一番印象深かったことは何ですか」と、よく質問されます。その時、いつも真っ先に頭に浮かぶのが、カナダの雄大な風景よりも、「カナダ人の温かさ」なのです。

私が訪問したリンゼイ市は、トロントから車で約二時間程のところの位置しており、緑をしきつめたようなとてもきれいな町です。道端にはいろいろな花が咲き、野生のリス、たぬき、うさぎなど、動物も多く、時にはスカンクにも会いました。そんな素朴な町のリンゼイ市、見るもの見るもの珍しく、新鮮に思え、い

●リンゼイ市

つのまにか言葉の違いなど忘れて、まるでカナダ人にもなったような気分が毎日を過ごしていました。

私は、リンゼイ市で二軒の家庭にホーム・ステイしました。どの家庭でも、まるで親子、姉妹のように接していただきました。食事の時など、あまり食べない

していると、「そんなに食べないでいると、

やせて死んでしまうよ」と叱られたり、いつしよに馬小屋の掃除をしたり、ベビースITTERをして手伝ったり—カナダ人と日本人という違いなんて、いつのまにか消え去り、「同じ人間、同士として、目に見えない心のつながりができたという、そんな気持ちになりました。

私がリンゼイ市を訪問した今年が、ちょうどリンゼイ市開基百二十五周年記念の年でした。七月三十日に盛大なパーティが催され、リンゼイ市の歴史にならって、オールド・ファッションに身をつつんだ老若男女が、オープンカーに乗り、メイストリートをパレードしていました。私も姉妹都市友好を祝うため、そのパレードに浴衣姿でオープンカーに乗ることになりました。その時はみんなに見られて恥しく、少し照れていた私に、リンゼイの人々は陽気に声をかけ拍手してください、終わった後に「とてもよかったです」と、肩をたたき、かけ寄ってくれるのでした。

リンゼイ市民は、日本の伝統にたいへん興味を持っていて、よく質問されました。それがきっかけで、幼稚園の生徒三十名程におりがみを教えることになり、「風船」と「やつこさん」を教えたのですが、

言葉で説明しようと思っても、英語でどう言っているかわからず、もう身振り手振りで四苦八苦しました。しかし、子どもたちの真剣な表情とできあがった時のうれしそうな顔を見たたん、私もうれしくなって「Very good, very good」と思わず、子ども達の頭をなでていました。

ホーム・ステイ中、どうしても忘れられないのは、一軒めの家庭から二軒めの家庭に移る時、こつそりと「何かあったら、電話をかけなさい」と、電話番号のメモを渡してくれたり、途中で二軒めのホスト・ファミリーの一人が流感にかかり、いつしよにいられなくなった時、お別れだからと起きてきて、「これ、Bingo (私のニックネーム) にあげる」と、プレゼントをくれた、そのやさしさです。それから他の家庭に移ってからも、心配していた私に、毎日のように病状を伝えてくれました。

二週間の短い滞在でしたが、青く澄みきった空、緑の大地、数多くの湖を前にして、「人間の本当のあり方」を見たような気がします。



ホスト・ファミリーと一緒に、ピーター・ホロ近くの湖畔で。

今、ふと目をつぶると、カナダの情景がそこにあり、あの時と変わらないみんなが笑って手を振っているのです。カナダ、オンタリオ州リンゼイ。これからもまた、いろいろな方がリンゼイを訪れるでしょう。そしてその時も、心優しい大きな温かさで包んでくれると思います。

(名寄女子短期大学一年)

トロント市から北東へ百二十キロ、五大湖のひとつオンタリオ湖のすぐ北に位置するリンゼイ市。名寄市が、小麦の産地で酪農や畜産も盛ん、そして風光明媚で夏にはトロント市近辺から観光客や避暑客が押し寄せるこのリンゼイ市と姉妹都市提携をしたのは一九六九年八月。一九五二年から昨年五月まで名寄市に住み、市民にも親しまれていたカナダ人宣教師F・G・ハウレット氏(夫人がリンゼイ出身で、結婚式もその教会で挙げた)の紹介がきっかけであった。

画市は、気候や風土だけでなく、行政面でも類似点が多く、姉妹都市提携は急速に進んだ。現在は、高校生の交換訪問、クリスマス・カードの交換、市民の相互訪問など、活発な交流を行っているほか、公園や通りに互いに相手の名前をつけて、友好を図っている。